

入試成績の追跡研究

——入試成績と学業成績との関係および評定平均値平均と学業成績との関係について——

小 高 晋 二

1. はじめに

昭和54年度より大学の入学試験制度は大きな転機を迎えた。言うまでもなく、国公立大学において共通1次試験制度が導入されたからである。この新制度が、従前の大学入試制度に関わっていた諸問題の解決に、どのように役立つかはしばらくその結果を見なければならぬだろう。しかし、いずれにしても、共通1次という制度が全大学の入試に関わるということになるとは目下のところ考えられないし、まして全私立短大にまでおよぶとは考えられない。従って、共通1次の制度と短大の入試とを結びつけて考える必要は当面ないであろう。

さて、本研究は、本学における学生の入学試験の成績に関し、それが、2ヶ年間に在学中の学業成績とどのような関わりを持つものであるかを明らかにし、また、2ヶ年間の学業成績と高校における学業成績とがどのように関係するものであるかを、併せて明らかにすることを目的とするものである。そして、このささやかな結果が、学力試験主体の入学者選抜方法改善へのひとつの資料にでもなればと思う次第である。勿論、この種の研究報告は過去にいくつかなされているが(注1)、短大におけるこの種の研究報告、また女子だけを対象としたものは管見にして私は未だ見ていない。これがひとつの参考になれば幸いである。

2. 対 象

この調査にあたって対象とした学生は、昭和52年度入学者で、昭和54年3月までに継続して2ヶ年間の学業成績を残した者とした。従って、昭和51年度以前の入学者で休学していた為に52年度に組み込まれた者や、52年度入学者であってもその後の2ヶ年間に休学した者、あるいは抹籍、除籍、退学した者などはすべて対象から外した。この結果、対象となった学生は、合計で462名、内訳は本学の設置学科別にそれぞれ文科159名、家政科169名、生活芸術科134名である。尚、無試験の優先入学者各科合計139名はこの調査から一応除外した。

3. 資料と方法

(1) 資料

この調査にあたって資料としたものは、入試の成績に関しては昭和52年度入学判定資料、本学在学中の学業成績に関しては教務部所管の学生成績表である。また、高校在学中の学業成績に関しては調査書を用いた。尚、これらの資料の閲覧にあたっては学校当局にいろいろご配慮をいただいた。

(2) 方法

この調査にあたっては、学生個人個人の成績を得点化する必要があったが、その得点化にあたっては以下のような方法を採用した。

まず、入学試験における成績の得点化は、入試判定資料に記載された得点をもってその学生の得点とした。尚、入試判定資料の総合得点は、学科試験（国語100点＋英語100点）得点＋調査書加点分（10点満点）で構成されている。

次に、本学在学中の学業成績の得点化にあたっては次のような方法を採用した。すなわち、原則として、2ヶ年間に履修したすべての科目に関し、優（80点以上）と評価されたものを3点とし、良（79点～70点）と評価されたものを2点、可（69点～60点）と評価されたものを1点、不可（59点以下）と評価されたものを0点とし、それぞれ科目数に乗じた合計点を科目数で除したものをその学生の得点とした。但し、教職専門科目に関しては、これを除外した。また、当初履修届を出しながら途中で放棄した科目も除外した。

さらに、高校在学中の学業成績の得点化にあたっては、調査書に記載されている評定平均値平均をもってその学生の得点とした。

従って、入試成績に関しては、満点であれば210となり、最低であれば2^(注2)となるはずである。また、本学在学中の学業成績については、いわゆる「全優」であれば3.00となり、履修科目が全部「不可」であれば0.00となるわけである。さらに高校時代における学業成績については、最高であれば5.0であり、最低であれば1.0となるわけである。

4. 結果

(1) 入試成績と学業成績との関係について

まず最初に、入試成績と学業成績との関係について調べてみた。図1～3は各科すなわち文科、家政科、生活芸術科における入学者の入試総合得点と、卒業時までの学業成績との関係を図にしたものである。この図において左軸には入試の総合得点を段階別に示し、右軸にはそれらの学生が2ヶ年修了時までどのような成績を修めたかを得点化して示した。中央の太線は参考として

図1 入試得点と学業成績との関係(1)
文科の場合(159名)

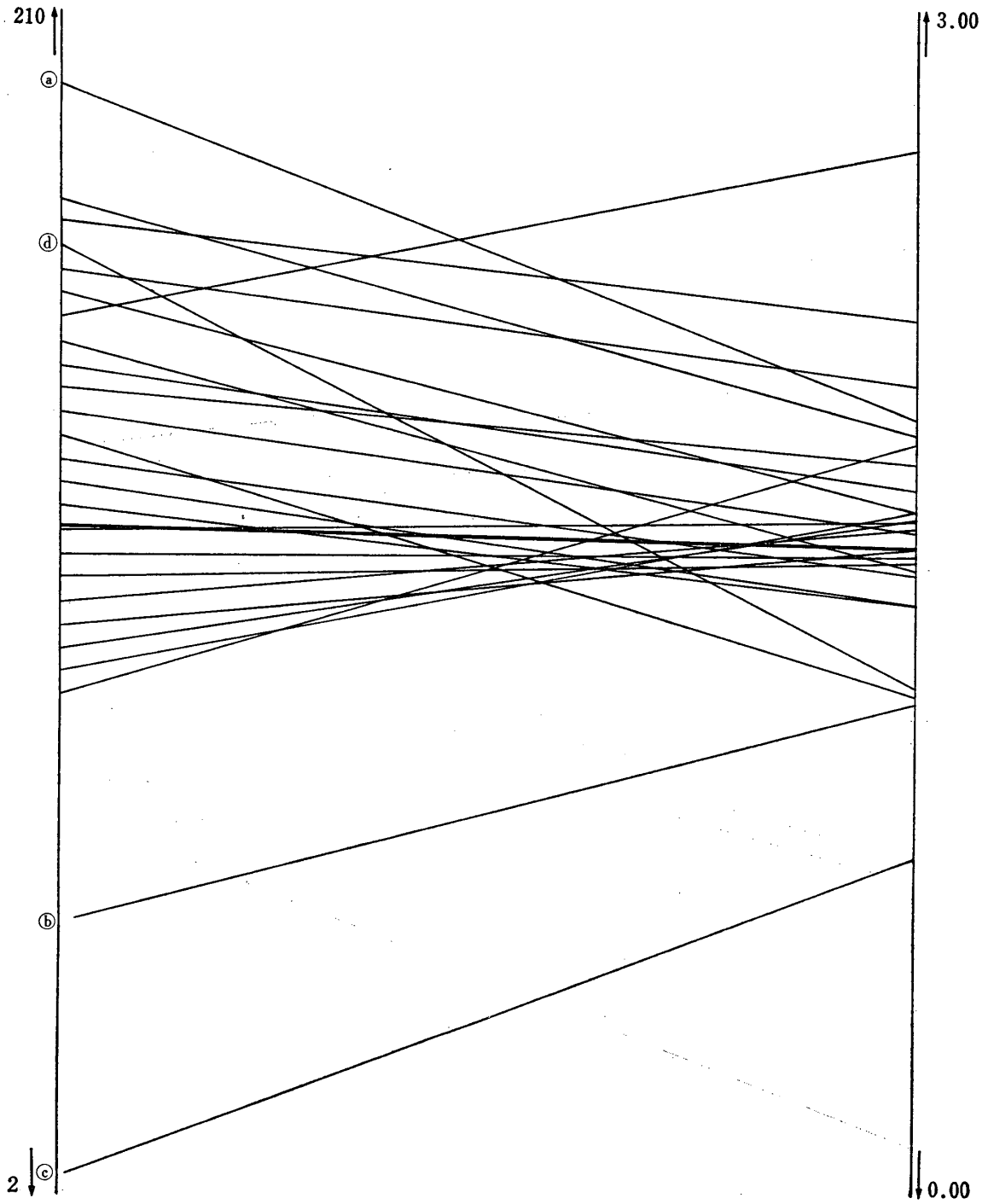


図2 入試得点と学業成績との関係(2)
家政科の場合(169名)

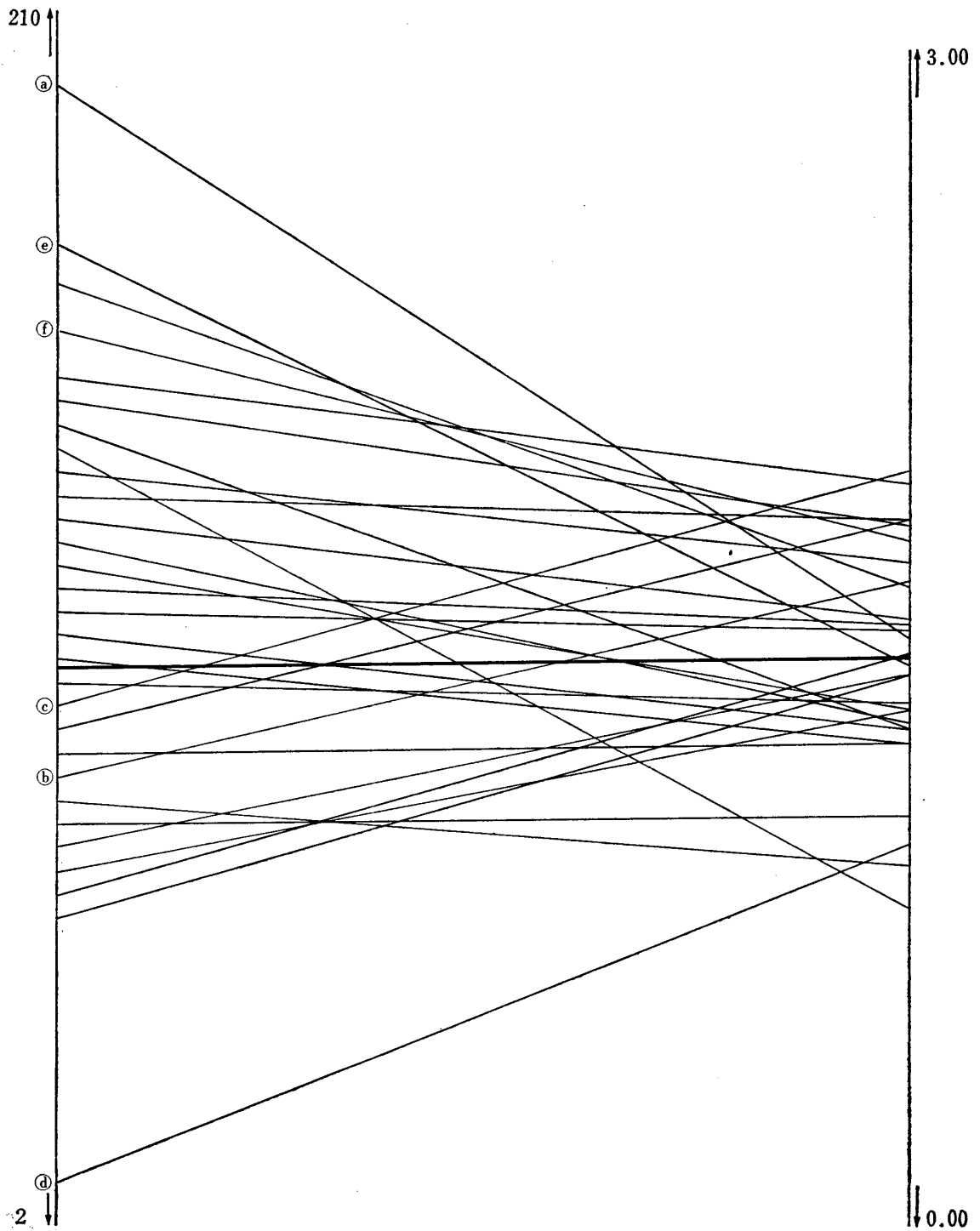
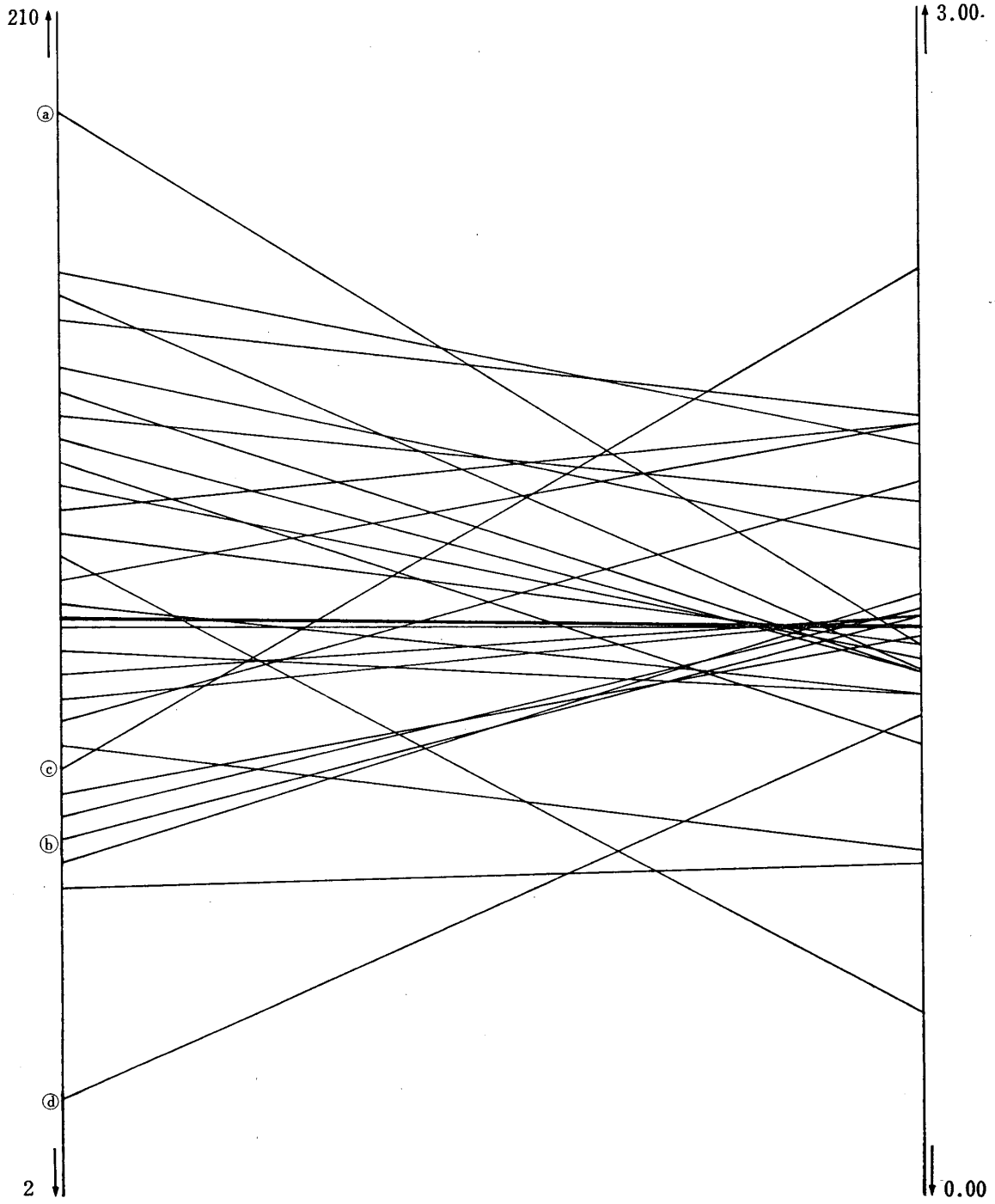


図3 入試得点と学業成績との関係(3)
生活芸術科の場合(134名)



入学者の平均総合得点と2年修了時の学業成績の平均得点とを結んでみたものである。尚、入試の得点については最上位グループと最下位グループは得点のばらつきが著しく、かつ、それぞれ少人数であったためにそれぞれ一括あるいは2分してまとめ、それぞれの平均点をもって得点とした(注3)。また、右軸の得点化にあたっては、例えば、入試同一得点者が3名の場合、それぞれの優・良・可・不可を得点化して合計し、3名の合計科目数で除したものを3名の平均学業成績の得点とした。

さて、これら図1～3を見てわかることは線が非常に錯綜しているということである。すなわち、これは、入試上位入学者に比較的右下り、つまり、学業成績の順位が下がり気味の者が多く、逆に下位入学者は比較的右上がり、つまり学業成績の順位が上がり気味の者が多いという傾向が見られた結果である。

もし、入試の得点順位がその学生の在学中の学業成績順位を完全に予測し得るものとすれば、当然各線は太線に平行になるか、あるいはそれに近い形になるはずであるが、これらの図の限りからすれば、現実には仲々そういう具合にはっていないのである。要するに、入試における成績は必ずしも後の学業成績を予測しなかったという結果なのである。

ところで、図1～3は一般入学者全員を対象としたものであるので、原則として、1得点段階に僅か1名しかいない場合でも図に記入してあるので、各線がより複雑に錯綜しているという事情が確かにあると思われる。そこで、よりはっきりとした傾向を見るために1得点段階について4名未満しかいないところを除いて図を作ってみたものが図4～6である。こうしてみると、確かに図1～3に比すれば多少はすっきりとする。しかし、これでもまだ右下りの線と右上りの線との交叉は依然として多く残るのである。これらの結果は、やはり、前述したように、入試における成績は必ずしもその後の2ヶ年間の学業成績を予測しなかったということであろう。

勿論、このような結果になったことについては、いくつかの理由を想像することはできる。例えば、上位入学者の場合、学生は入試突破を目指して一生懸命学力をつけたが、入学してからは勉学の意欲を喪失してしまったとか、あるいは、勉学の意欲を喪失したわけではないが安心して油断をしてしまったとか、また、勉学よりもアルバイトに精を出し、クラブ活動に熱中し過ぎたためであろうとかである。その他にも、学生の側の責任にばかりには帰せられない原因もあるかも知れないのである。例えば、教師の側の指導の適切さが欠けていたとかいう場合もあるかもしれないのである。しかし、個々の学生にとってそれぞれの事情のあることは当然であろう。だとすれば、上位入学者であろうと下位入学者であろうと、条件は皆同じであろう。にもかかわらず、上位入学者は右下りの傾向をまた、下位入学者は右上りの傾向を各科とも示したということは、結果的に言えば、再三述べるように、入試の成績はその後の学業成績を予測しなかったということである。端的に言えば、入試における成績は偶然の要素に支配されたものであったとも言えるのではないだろうか。

図2, 3を見ていただきたい。図2(家政科)の場合、最上位の入学者グループ①は入試時に

図4 入試得点と学業成績との関係(4)
文科で1得点段階に該当者が4名以上いる場合

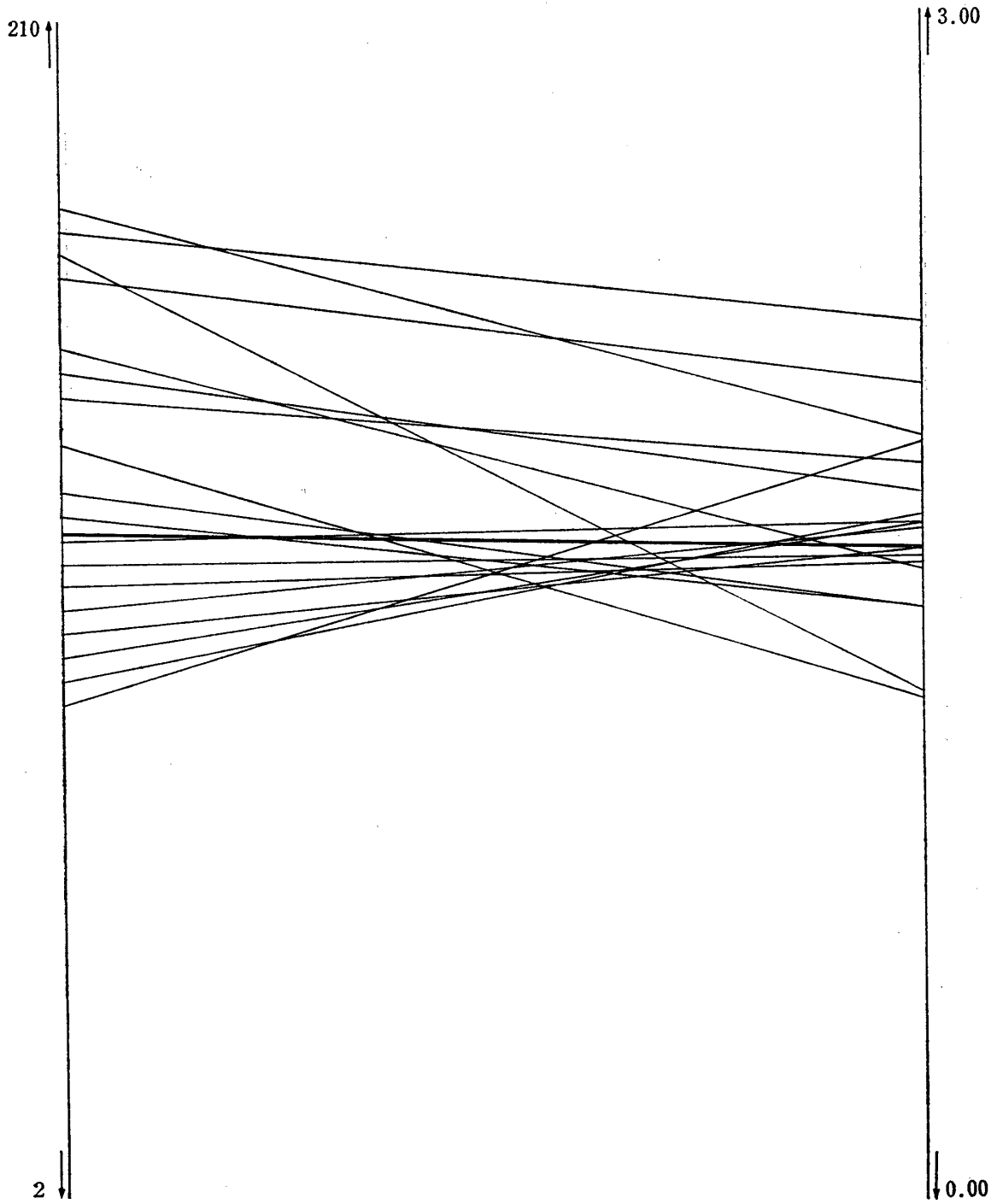


図5 入試得点と学業成績との関係(5)
家政科で1得点段階に該当者が4名以上いる場合

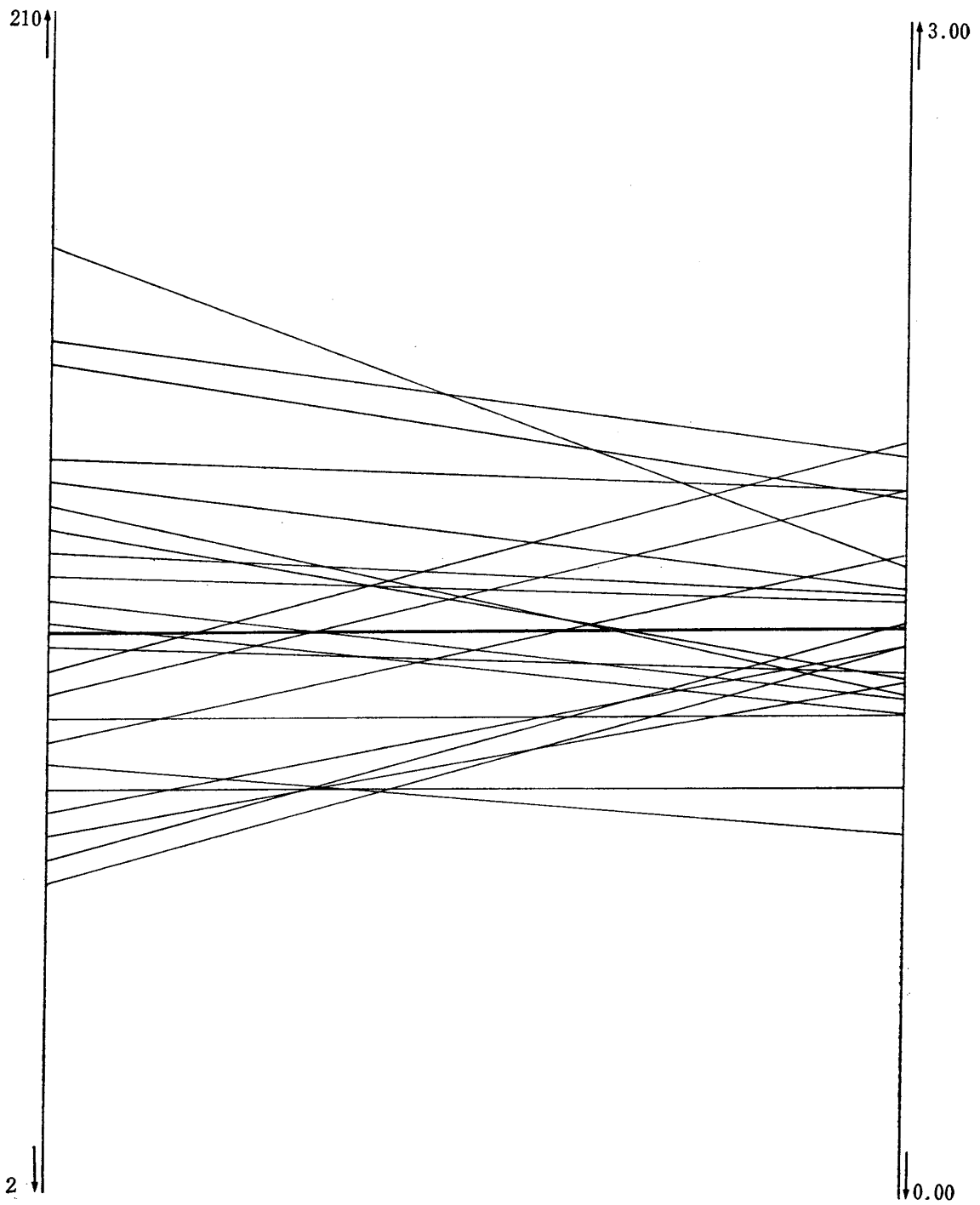
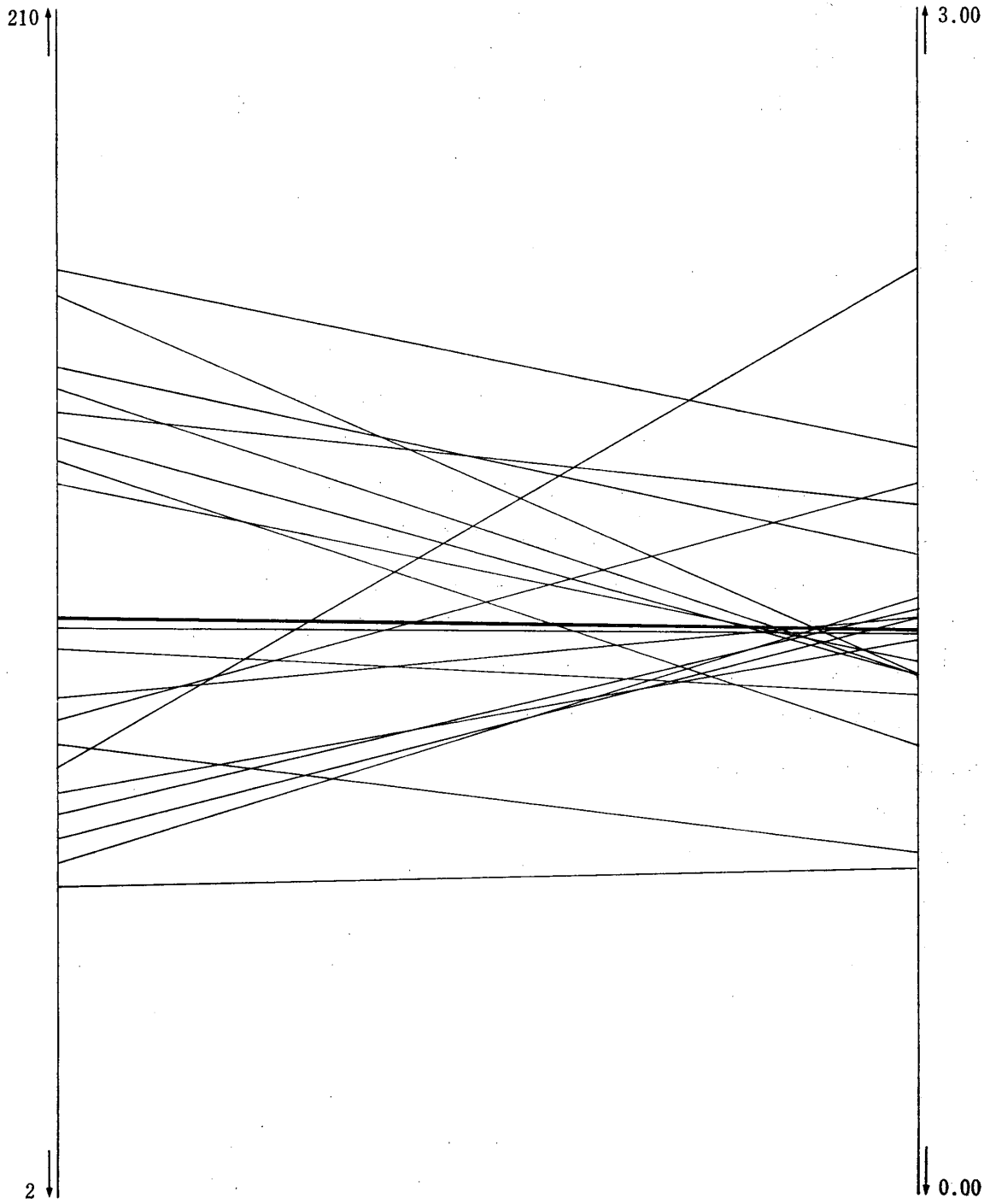


図6 入試得点と学業成績との関係(6)
生活芸術科で1得点段階に該当者が4名以上いる場合



においては入学者の平均得点をも下回っていたグループ⑥にすら結果的には追い抜かされてしまうのである。そして、結果として最高の学業成績を修めたグループ③は、入試時においてはこれまた入学者の平均得点を下回っていたグループなのである。また図3（生活芸術科）の場合でも、同様に最上位の入学者グループ①は、やはり、入試時においては最下位に近いグループ⑥に追い抜かされてしまい、結果として最高の学業成績を修めたグループは、家政科と同様に、入試時においては入学者の平均得点を下回っていたグループ③なのである。図1（文科）の場合であっても、図2、図3ほどのことはないがそれでも入試時の上位グループ①が2ヶ年後には最下位に近いグループに落ちているという場合もあるのである。

以上、入試成績と2ヶ年間の学業成績とを比較検討した結果は、相互の関連性が少ないということであった。しかし、一方では、次のようにも言えるのである。すなわち、入試において得点の大きく離れた下位グループ（図1⑥③、図2④、図3④）は、結果として、学業成績においても概して下位グループになると。

(2) 評定平均値平均と学業成績との関係について (イ)

次に学業成績と高校在学中の成績との関係についても興味があったので調査してみた。これについても、既に、一般的には大学在学中の学業成績は入学試験成績よりも高校時代の学業成績との相関が高いことが多いとの報告が出ているが(注4)、果して本学の場合はどうであろうか。

図7～9は各科ごとに高校時代の学業成績と本学における学業成績との関係を図にしたものである。これらの図において、左軸には高校在学中の学業成績、つまり各教科の評定平均値平均の各段階を示し、右軸にはそれらの学生達が2ヶ年間に残した学業成績を得点化して示した。中央の太線は、入学者を平均した評定平均値平均と学業成績の平均とを結んだものである。もし、高校時代の学業成績と本学における学業成績とが密接に関係するものとすれば、つまり、高校時代に良い成績を残した者が本学においても良い成績を残し、悪い成績の者が悪い成績しか残さないとすれば、各線は中央の太線に平行するはずである。さて、図7～9を見てみよう。これらの図を見ると、先の図1～3に比して線の交叉が少いことがわかる。今これを先の図4～6にならって、4名未満を除外して図を作成してみると、それぞれ図10～12のようになる。こうしてみると、線の交叉が少なくなることが益々はっきりとする。つまり、高校在学中の学業成績は概して本学在学中の学業成績と平行する、換言すれば、高校在学中の学業成績は、大よそのところその後の2ヶ年間の学業成績を予測するという結果になったのである。特に図10（文科）、図11（家政科）の場合など、線は殆んど平行し、交叉するにしても鈍角に交叉することはないのである。すなわち、家政科にあっては、高校在学中の学業成績により上・中・下位の3グループに分けた場合、2ヶ年間の学業成績の結果もそのまま上・中・下位グループを形成するに至ったのである。また文科にあっては、家政科のようにはならなかったが、それでも、上・中位グループと下位グループとでは順位の変動は見られなかったのである。ただ生活芸術科（図12）の場合には必ずし

図7 評定平均値平均と学業成績との関係(1)
文科の場合(159名)

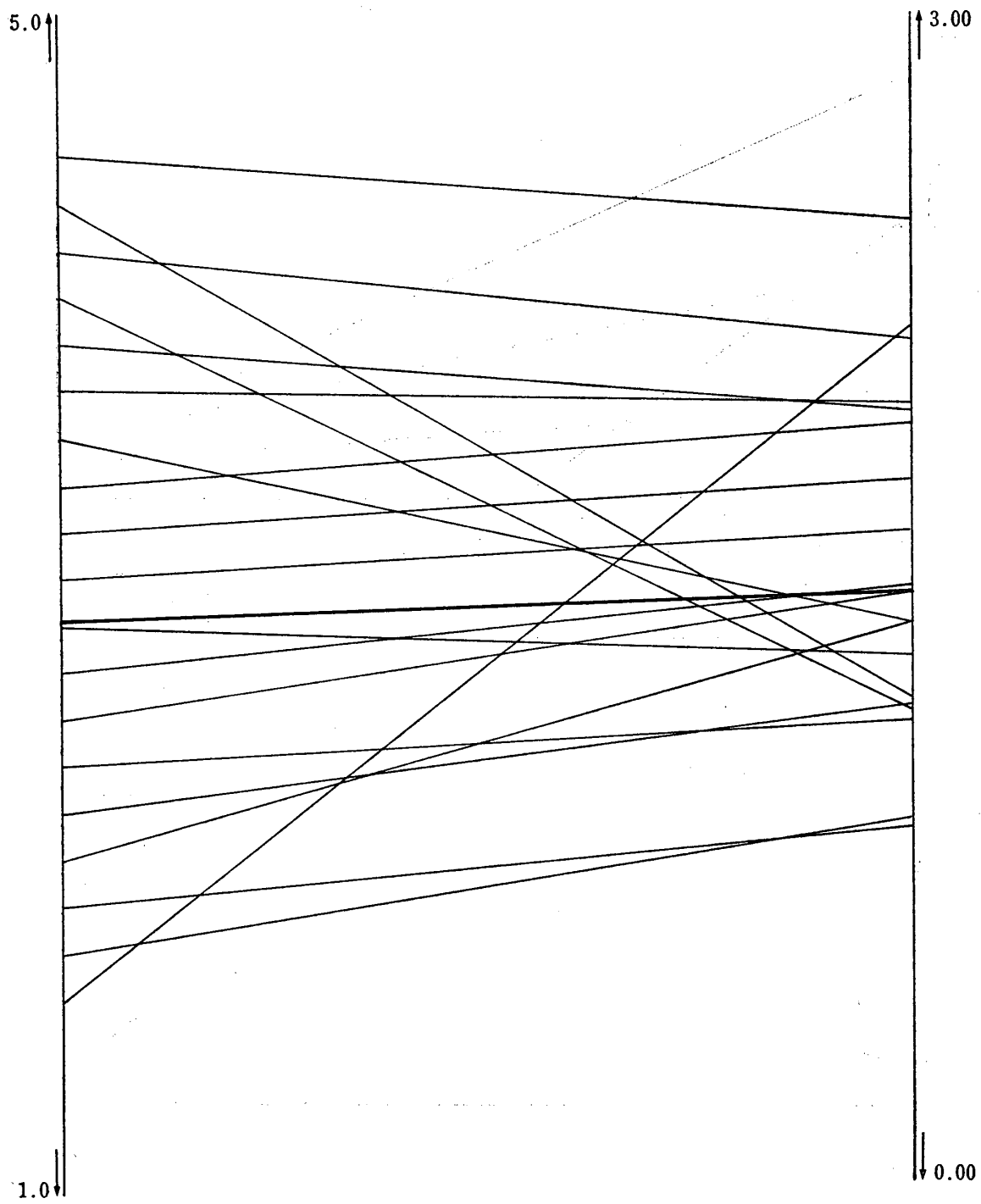


図8 評定平均値平均と学業成績との関係(2)
家政科の場合(169名)

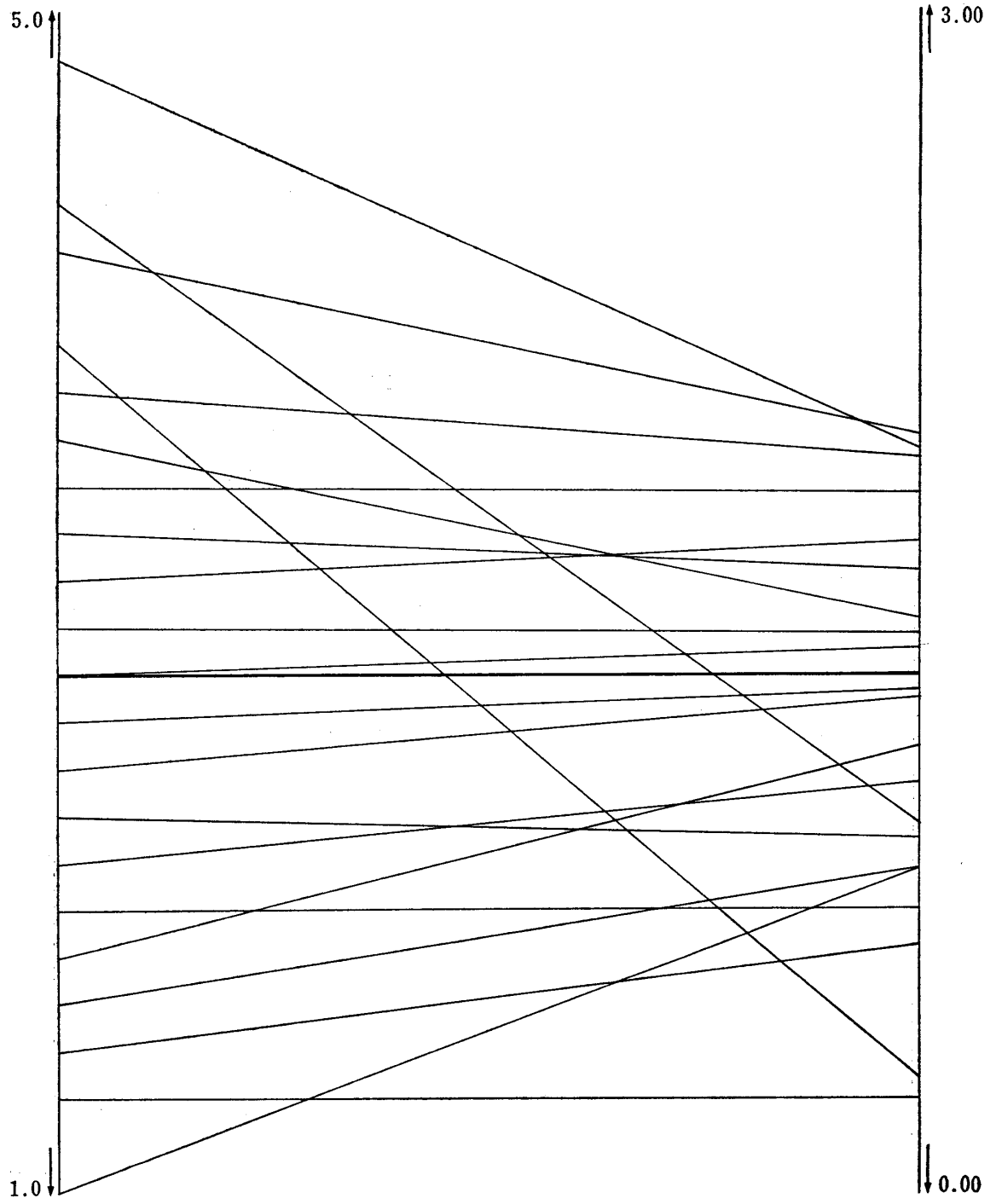


図9 評定平均値平均と学業成績との関係(3)
生活芸術科の場合(134名)

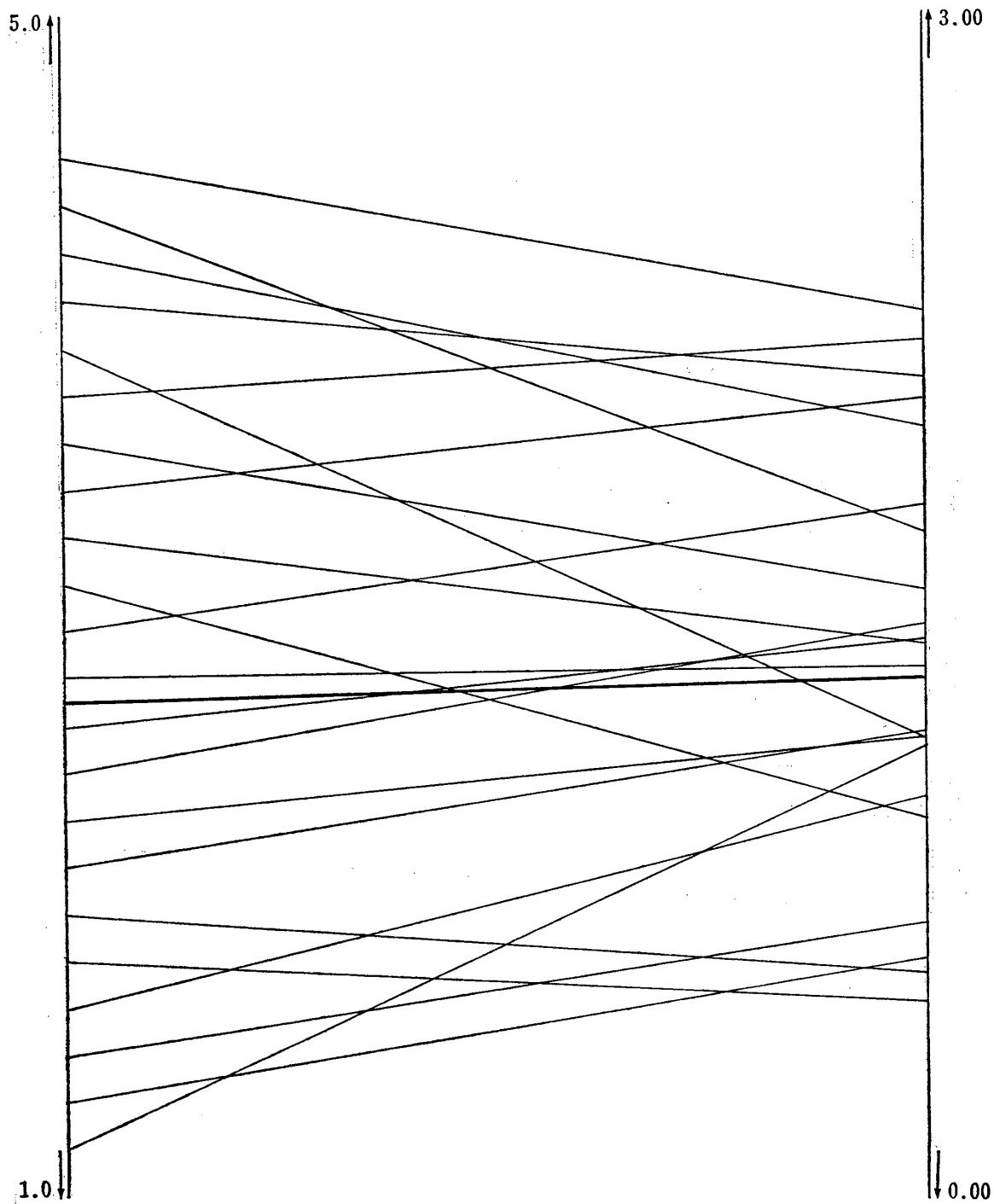


図10 評定平均値平均と学業成績との関係(4)
 文科で1段階に該当者が4名以上いる場合

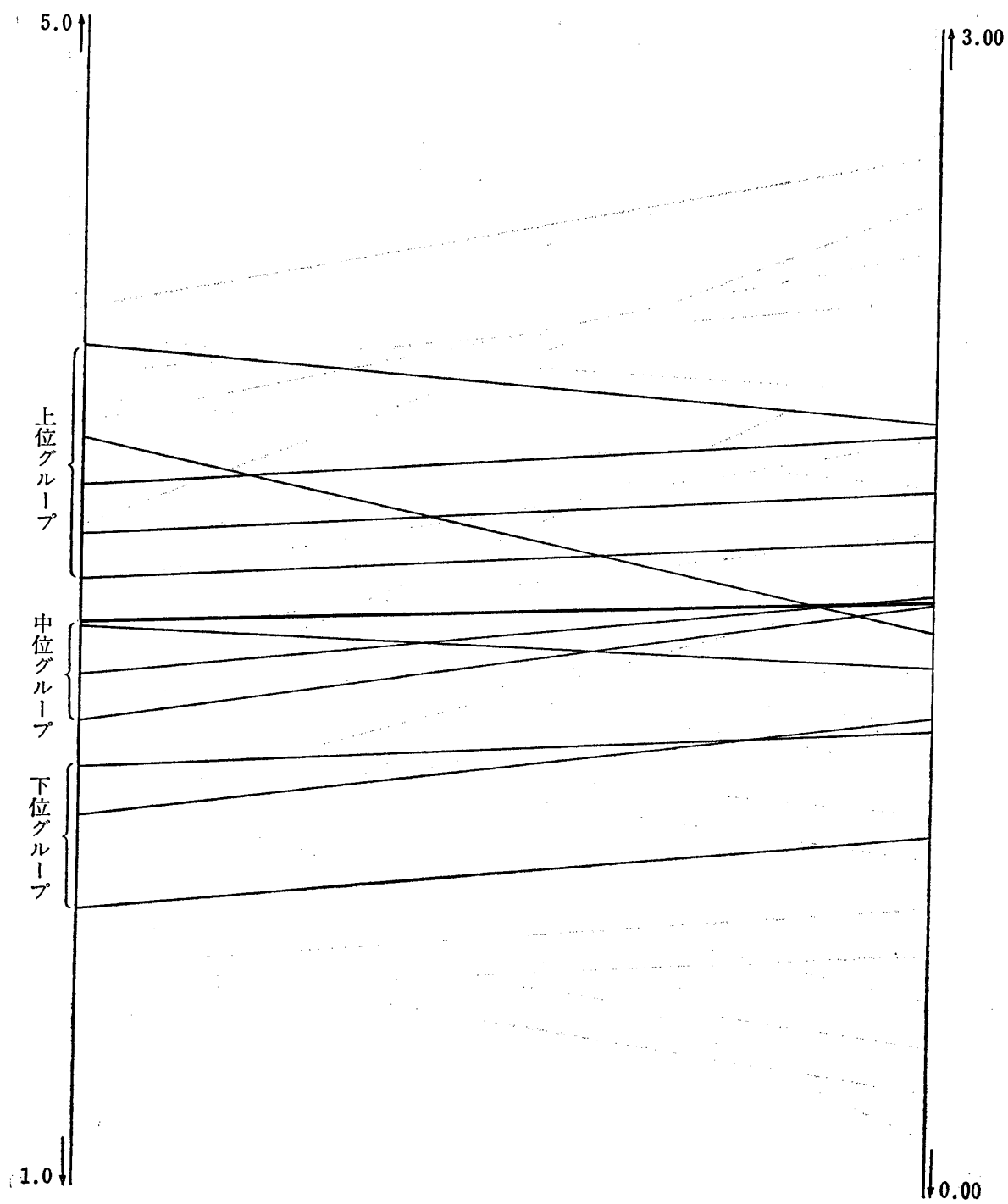


図11 評定平均値平均と学業成績との関係(5)
 家政科で1段階に該当者が4名以上いる場合

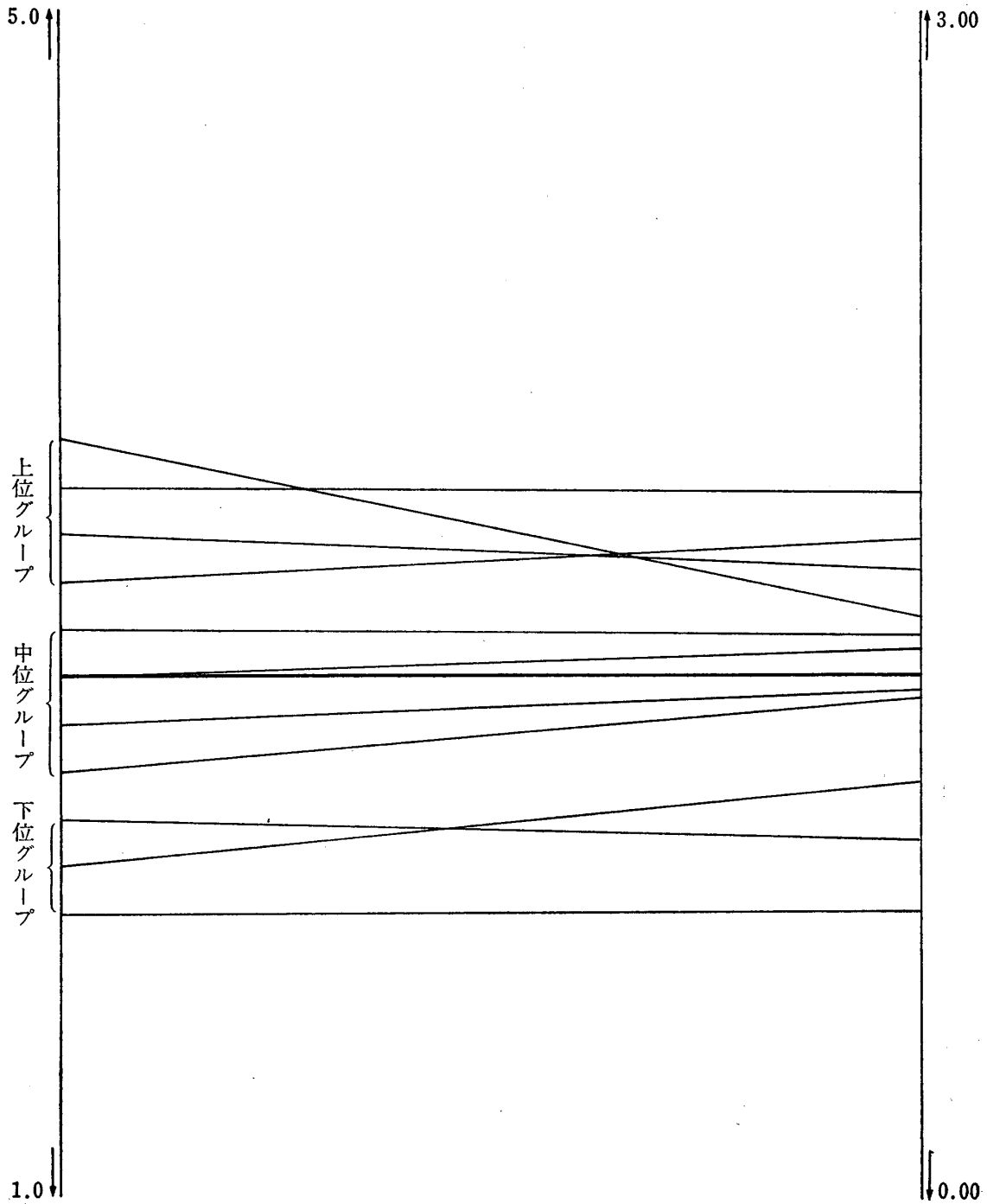
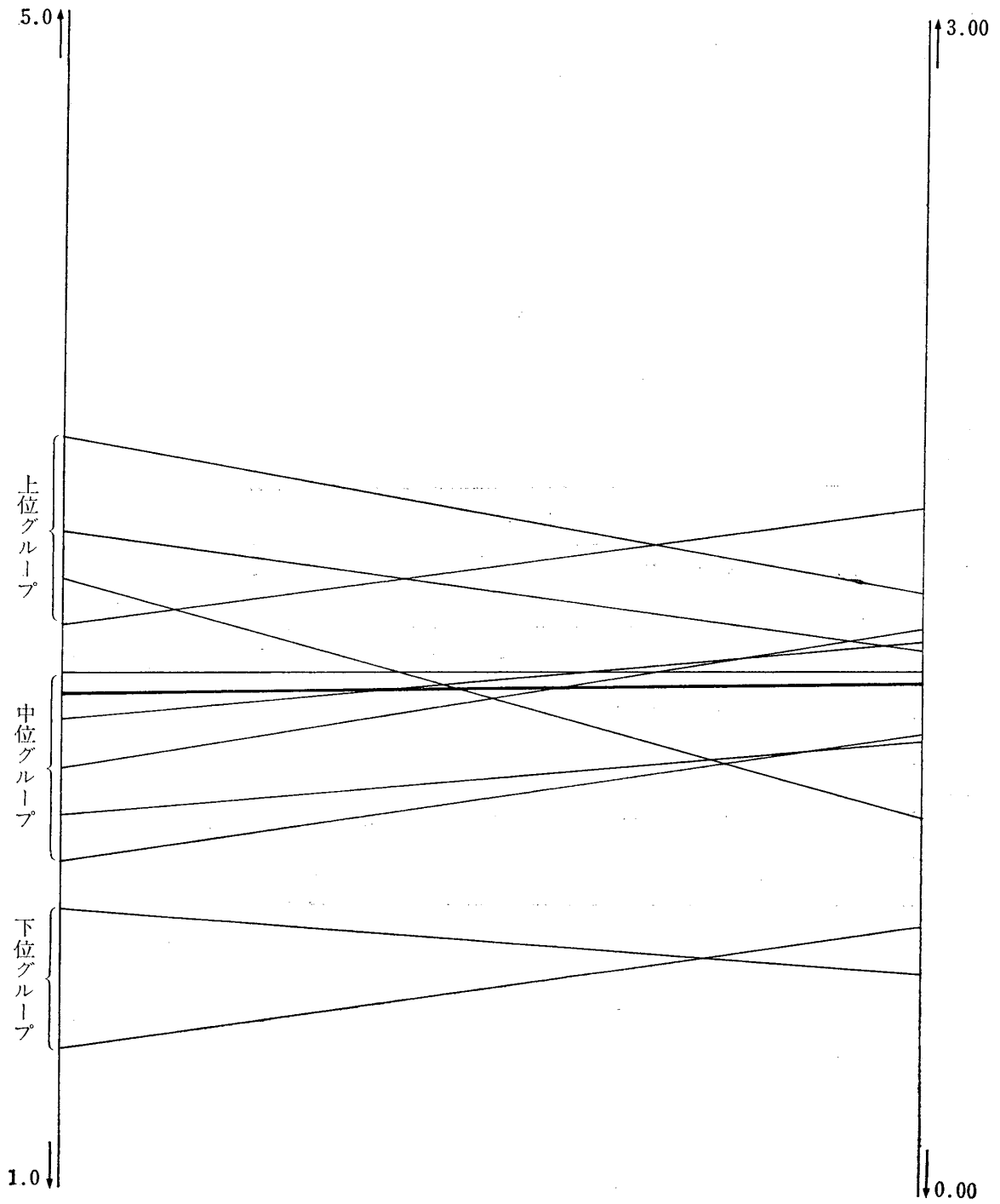


図12 評定平均値平均と学業成績との関係(6)
生活芸術科で1段階に該当者が4名以上いる場合



も他の2科のように平行はしなかったわけであるが、これは科の特殊性（実技科目を多く含む）によるものと思われる。

以上の結果は、いずれもいわゆる学校差というものを無視した結果である。無視した場合であってもこのような結果の出たことは、単年度の結果ではあるが、興味あることであると思われる。

以上、大まかに言って、高校在学中の学業成績はその後の2ヶ年間の学業成績を予測しえたという結果であった。

(3) 評定平均値平均と学業成績との関係について（ロ）

前項においては、一応いわゆる学校差というものを無視して高校在学中の学業成績と本学在学中の学業成績との関係を検討してみたわけであるが、その結果は、前述の通り、相当に関係の深いことがわかった。しかし、このことは、どの高校であっても、その評定が全く同一のものとして考えていいということを本当に示すものなのであろうか。次にこのことを検討してみた。但し、個々の高校よりの進学者が比較検討し得るほどに多数いる場合は少いので、ここでは大別して次のように分けてみた。すなわち、(A)都内の公立校出身者、(B)都内の私立校出身者、(C)都外の公立校出身者、(D)都外の私立校出身者、それぞれ該当する人数は(A)159名、(B)86名、(C)187名、(D)30名であった。これらの学生の評定平均値平均と学業成績との関係を図にしたものが、図13～16である。前項同様、図の左軸には評定平均値平均の各段階が示されており、右軸には学業成績の到達点（点）が示されている。尚、破線は全体の平均を示し、太線は各学校群の平均を示している。これらの各図を見て気づくことは、前項の場合と同様に、概して、平行線が多く、交叉する線の少いことである。このことは、図4～6、図10～12と同様に、1段階に該当者が4名未満の場合を除外した図を作ってみると、より一層明確になる。すなわち、図17～19がそれである(注5)。これらの図からすれば、線が交叉する場合でも、それは殆んど鋭角に交叉するのみである。特に、図19などを見ると、評定平均値平均に従って上・中・下位グループに分けた場合、グループ内では線は交叉するが、グループを越えては交叉しないのである。このことは、図17の場合にもグループa)を例外として除けばあてはまるのである。しかしながら、図18及び図16の場合には必ずしもそうはならないという結果であった。これらのことを含めて、出身校群別に評定平均値平均と学業成績との関係をまとめてみると次のようになる。a)都内公立校出身者の場合には、高校時代の学業成績と本学在学中の学業成績は、大体において平行し、しかも、評定平均値の割には良い学業成績が残せた。b)都内私立校出身者の場合には、高校時代の学業成績と本学在学中の学業成績とが平行する者と、評定平均値平均の割には学業成績の悪い者とが相半ばした。c)都外公立校出身者の場合には、両者はほぼ平行し、期待通りの学業成績が残せた。d)都外私立校出身者の場合には、評定平均値平均通りに、またはそれ以上の学業成績を残せた者は稀で、多くは評定平均値平均の割には良い結果が残せなかった。

図13 評定平均値平均と学業成績との関係(7)
都内公立校出身者の場合(159名)

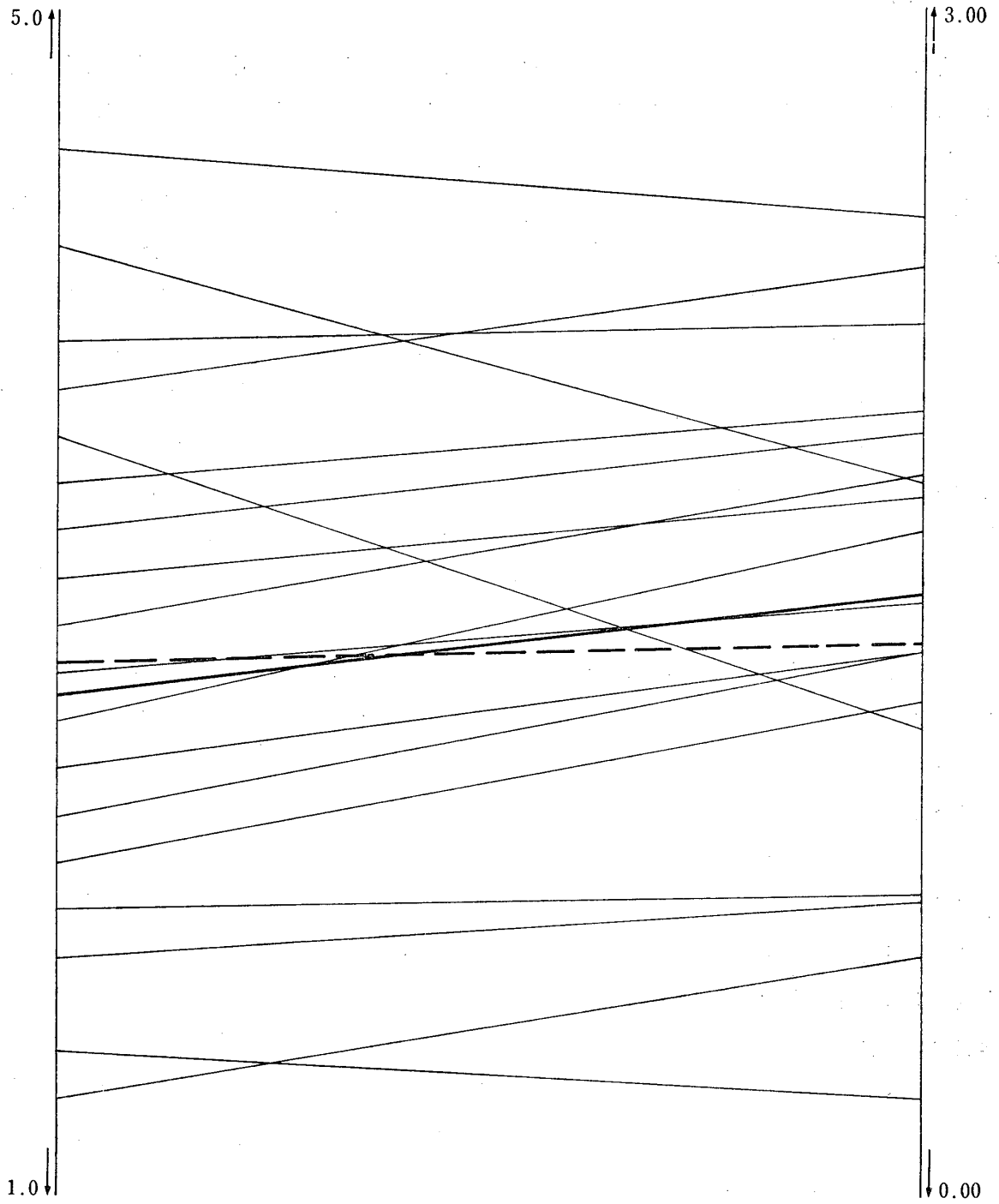


図14 評定平均値平均と学業成績との関係(8)
都内私立校出身者の場合(86名)

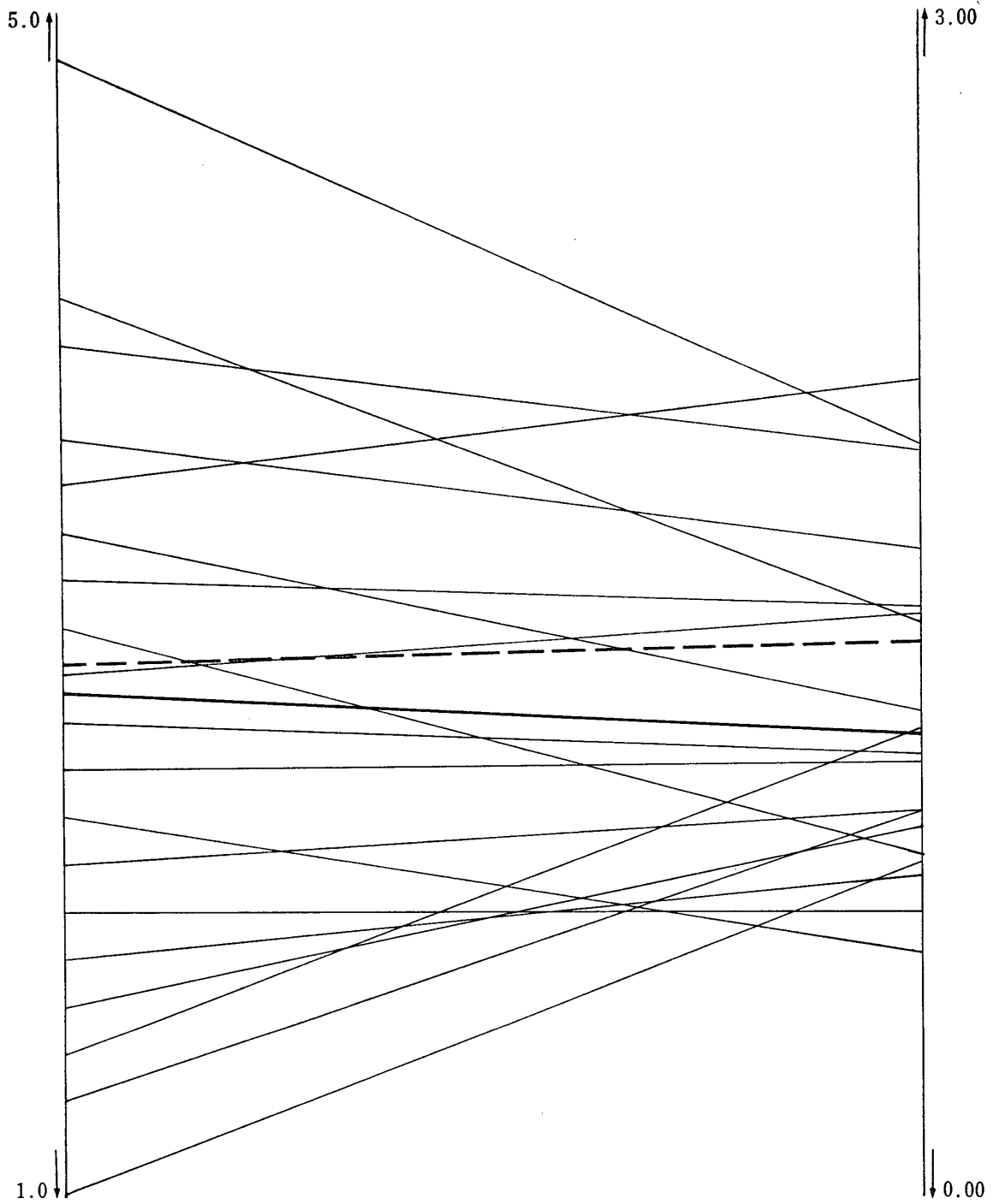


図15 評定平均値平均と学業成績との関係(9)
地方公立校出身者の場合(187名)

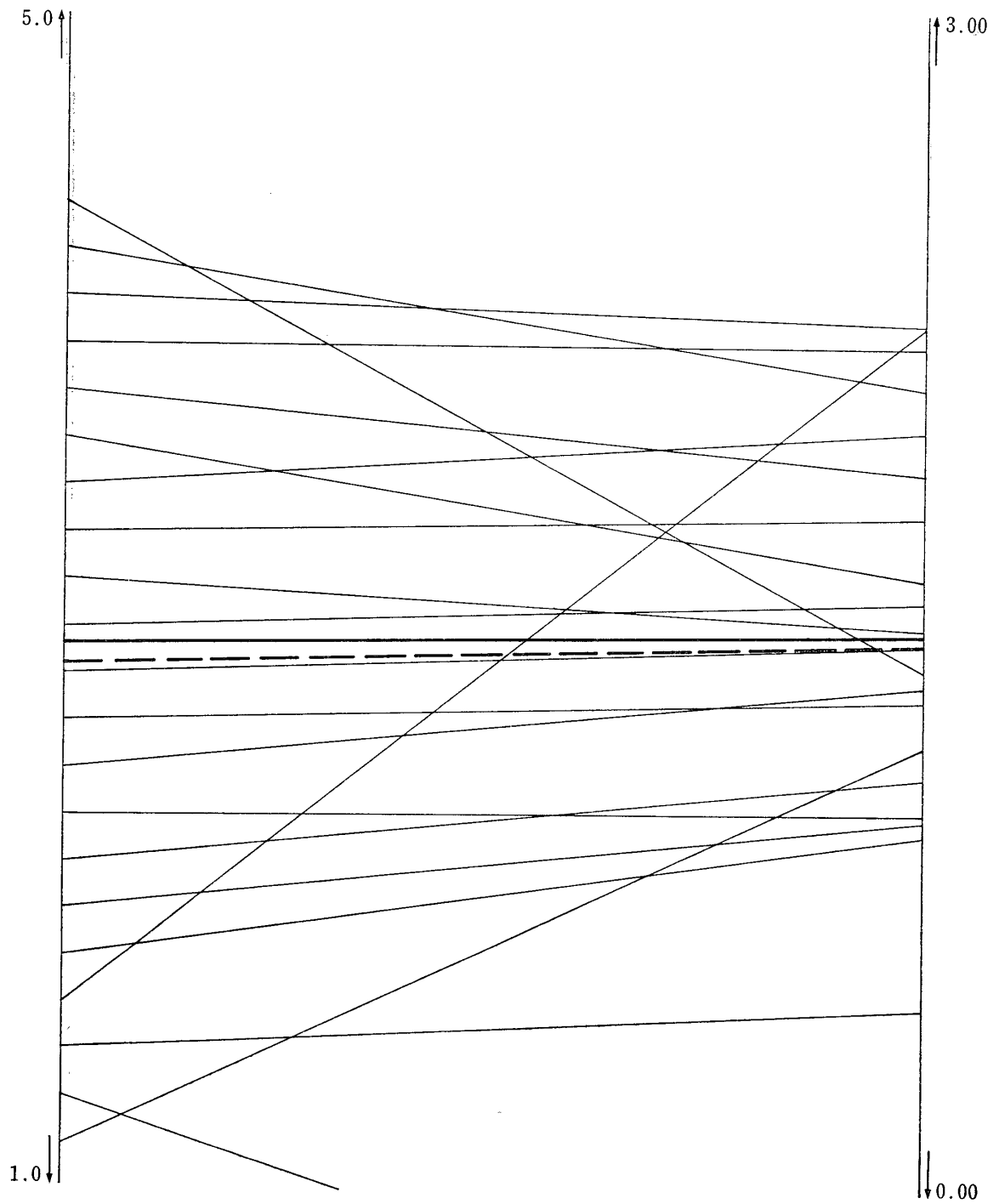


図16 評定平均値平均と学業成績との関係(10)
地方私立校出身者の場合(30名)

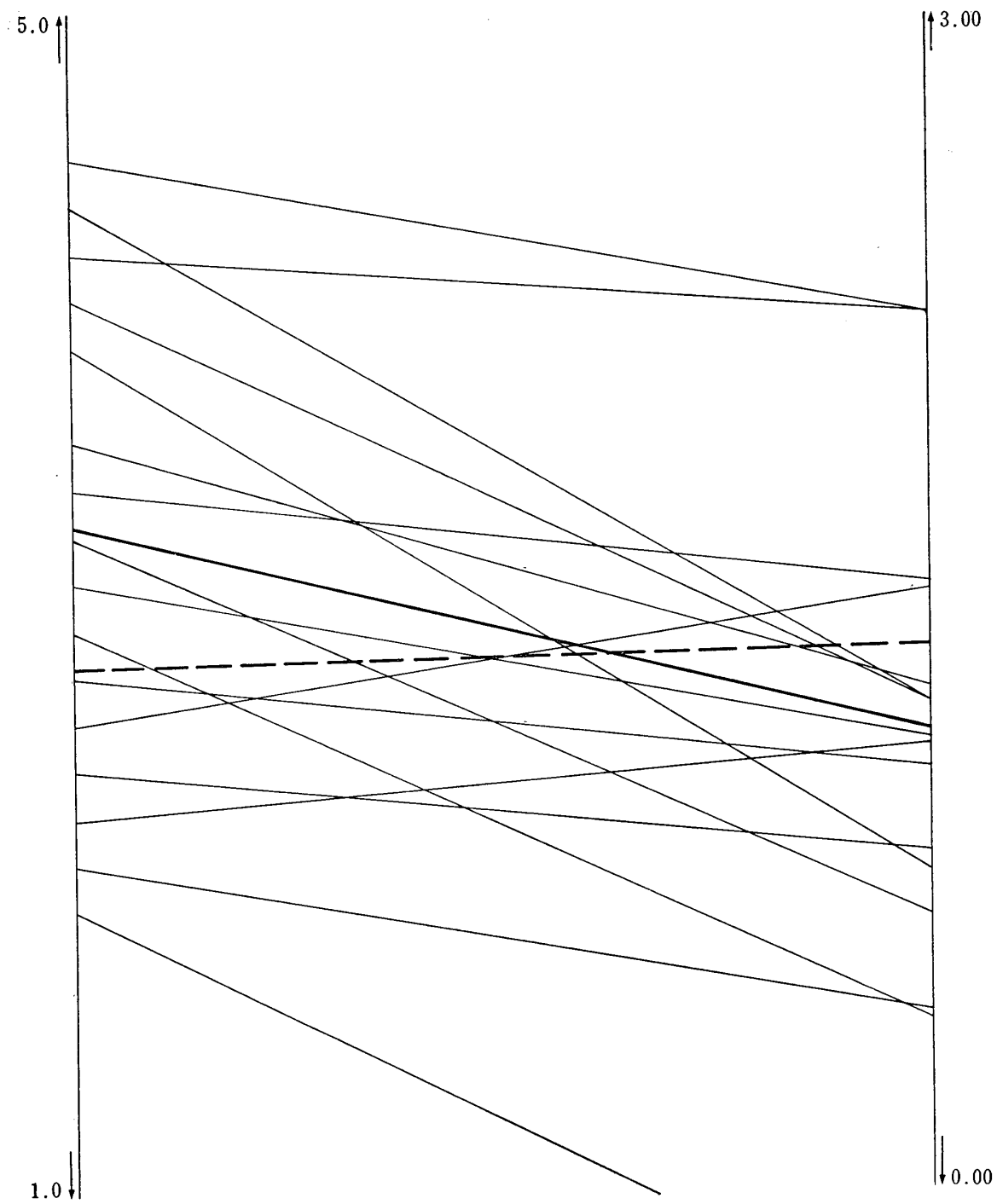


図17 評定平均値平均と学業成績との関係(1)
 都内公立校出身者で1段階に該当者が4名以上いる場合

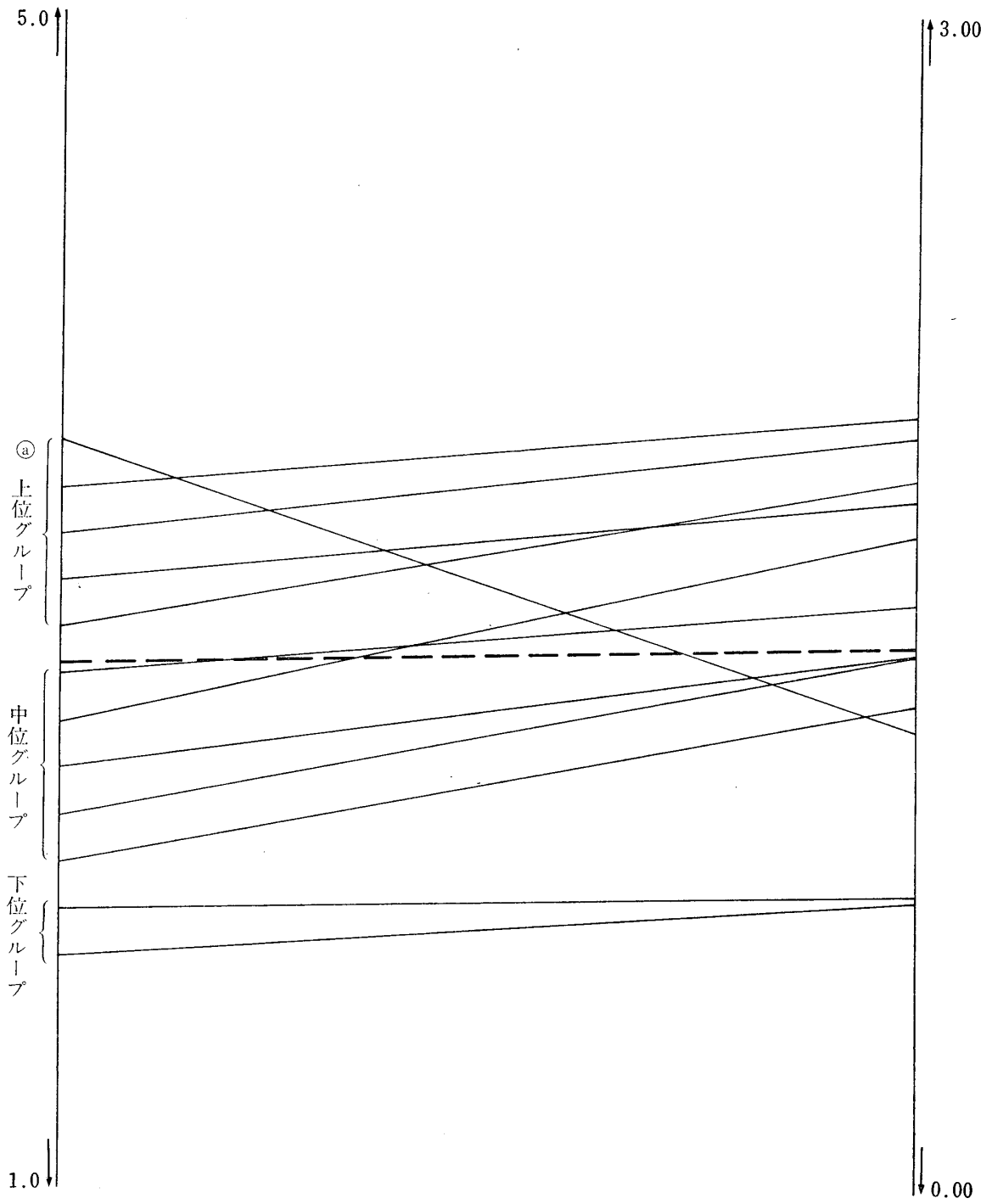


図18 評定平均値平均と学業成績との関係(12)
 都内私立校出身者で1段階に該当者が3名以上いる場合

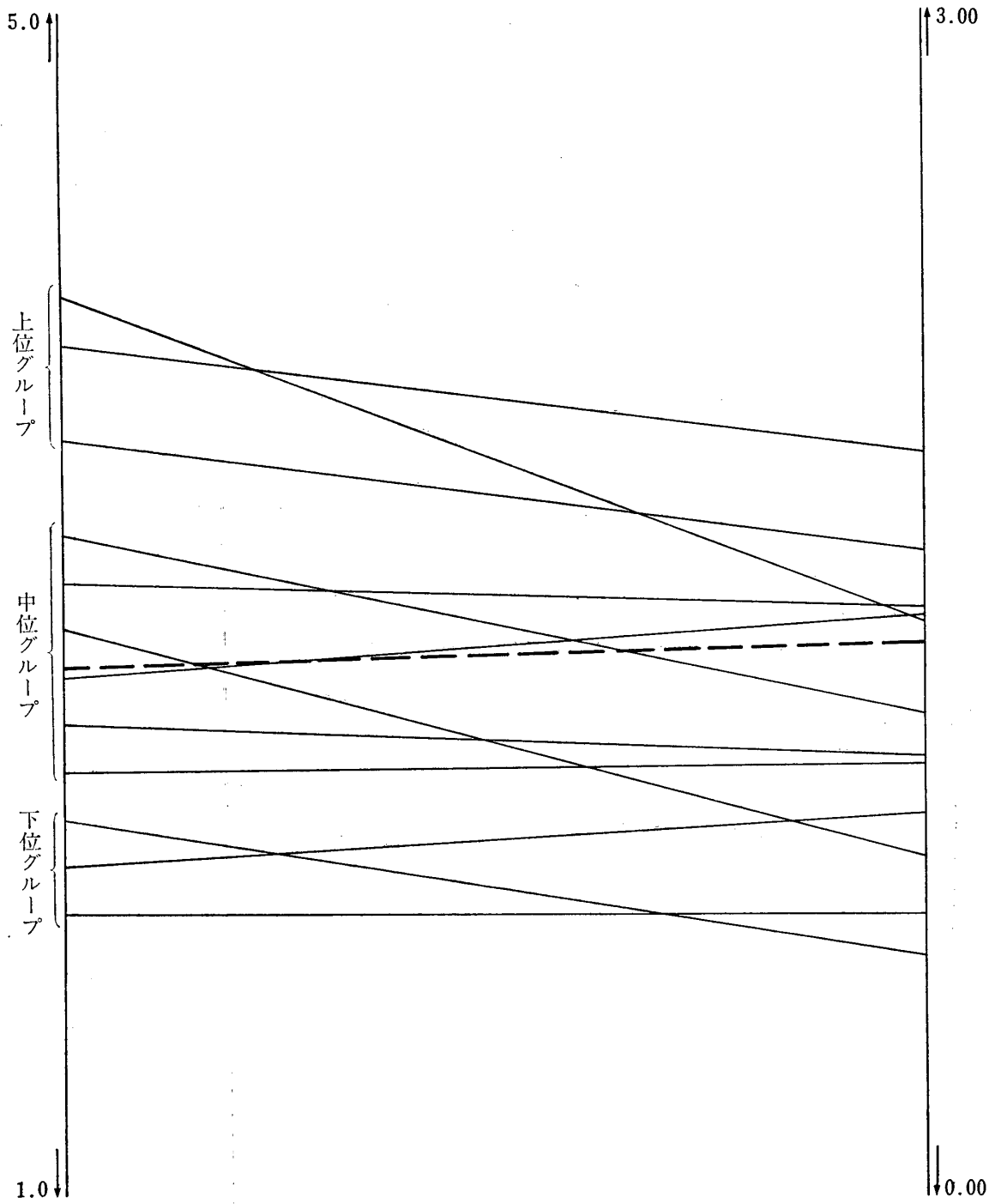
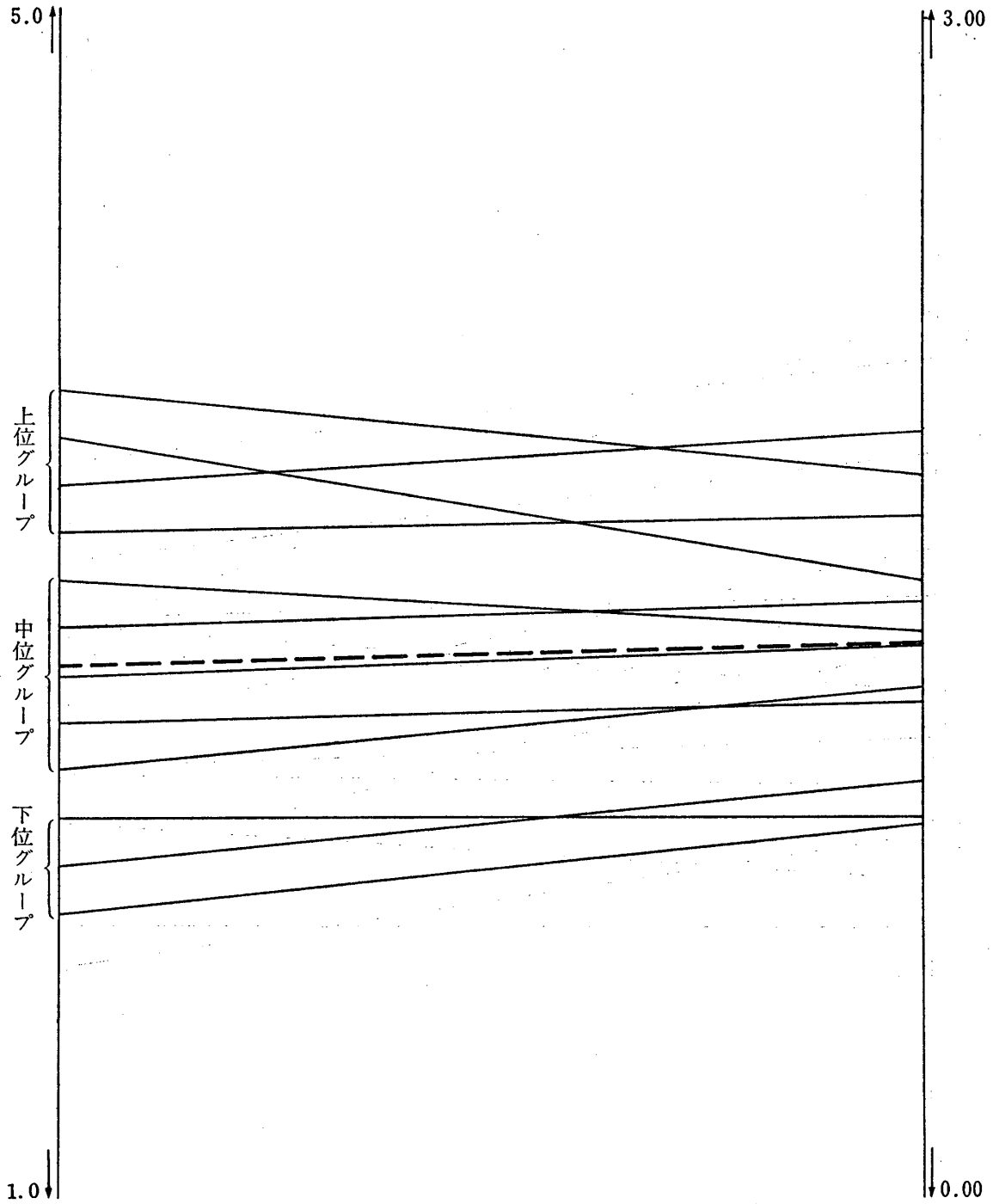


図19 評定平均値平均と学業成績との関係(3)
 地方公立校出身者で1段階に該当者が4名以上いる場合



5. まとめ

以上のことをまとめると次のようになる。

- 1) 入学試験による成績の順位は、必ずしもその後の学業成績を予測しなかった。
- 2) 大学在学中の学業成績は、入試成績よりもむしろ高校時代の学業成績に密接に関係していた。
- 3) 高校間の評定平均値平均に関する学校差については、公立校についてはあまり見受けられなかった。しかし、私立校、特に都外の私立校については、学校差があった。

これらの結果からすれば、僅か1ヶ年間の結果であるので、断定は避けねばならないが、2科目に関して2時間程度の学力試験を課すだけの入学者選抜方法には大いに問題があるということである。従って、入学者の選抜にあたっては、その大学の要求する学生像を踏えつつ、単なる学力試験だけではなしに、小論文、面接を採り入れるとか、あるいは、調査書をより多く参考にするというような、学力試験とは別種なフィルターを課すことが必要かと思われる。

注1 例えば、

(イ)西堀道雄・松下康夫「大学入学試験に関する研究(Ⅱ)―高校学業成績および大学入学試験成績と大学在学中の学業成績との関係」国立教育研究所紀要第37集

(ロ)柴原恭治「大学の入試学科成績と大学の学業成績との関係について」三重大学学芸学部研究紀要24

(ハ)佐藤双九郎「大学入学試験の追跡研究―佐賀大学教育学部昭和37年度入学者の場合」佐賀大学教育学部研究論文集14

(ニ)溝淵義雄「入試成績と入学後の成績の分析―大学入試成績と一般教育及び外国語の成績ととの相関」高知大学教育学部研究報告第1部第19号

(ホ)徳光直「入学成績と卒業成績の相関について―山口大学教育学部の場合」山口大学教育学部研究論叢23巻第3部

注2 調査書加点分は、評定平均値の平均を2倍して4捨5入したものであるので、もし考えられる最低の評定平均値平均が1としても2にはなるわけである。

注3 平均点としたものは、図1(a), (b), (c), 図2(a), (e), (f), (d), 図3(a), (d) である

注4 西堀・松下；前掲論文および佐藤；前掲論文。

注5 都外私立校出身者は僅か30名であるのでこの操作は省略した。